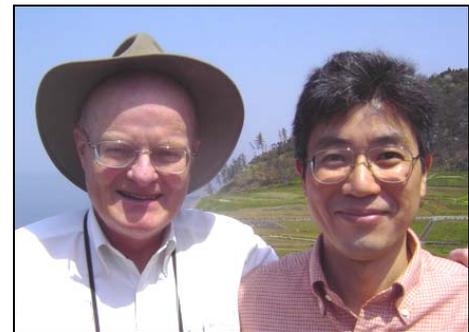


診断入門：ティアニー先生との出会い、教え

金沢大学医学教育研究センター／リウマチ・膠原病内科 松村 正巳（石川県9期）

ティアニー先生との出会い

私に診断の本質を教えてくれたのは、ローレンス・ティアニー先生（カリフォルニア大学サンフランシスコ校内科学教授）です。私は毎年ティアニー先生を招聘し、症例検討を通して臨床教育を行なっています。このとき先生には症例の内容は事前に一切知らせず、本番で診断のプロセスを語ってもらいます。診断を当てるのが第1の目的ではありませんが、誰もが診断をはずしたくないものです。ですから、このような役を引き受ける医師は滅多にいません。



先生との出会いは、2002年の国際内科学会でした。Clinical problem-solvingのセッションがあり、discussantがティアニー先生でした。先生は身体診察にも優れ、検査結果に着目することもあります。しかし、どんな症例を呈示しても、臨床推論の8~9割を病歴で行います。先生と出会うまで、このような実践を私は知りませんでした。世界の内科医を相手に、ときにユーモラスに診断に迫る姿に、相当なショックを受けました。自分のレベルを鑑み、このような医師の存在が信じられませんでした。

臨床推論の基本は病歴

ティアニー先生曰く

「診断のための3つの重要な要素は、病歴、病歴、病歴」

病歴は患者の身体的問題を時間経過に沿って、医師が編集した患者の物語です。診断が困難なときほど詳細な病歴が必要です。詳細な病歴聴取は一見時間がかかるように思えるかもしれませんが、最終的には診断までの時間を節約します。さらに、この作業は患者-医師関係を良きものにします。「よく話を聴いてくれる医師だ」と。患者との対話、そこから鑑別診断を掘り起こす先に正しい診断が見えてきます。

臨床推論の能力獲得に必要な要素

私は、臨床推論の能力獲得に必要な要素を以下のように考えています。

1：興味、2：観察、3：経験、4：教育、5：基礎医学、6：謙虚

興味

患者の問題に幅広く興味を持つことが出発点です。どんな職業でも、興味を持たなければ進歩はないでしょう。「これは私の専門ではない」と考えることは、特定の専門医には許されるのかもしれませんが、「私の専門でない」という意識は、臨床推論に瑕疵を作る可能性があります。さらに、謎解きの過程を根気よく解く忍耐も必要です。興味がないと辛い作業になります。

観察

観察（視診）は身体診察の基本です。初診時は病歴聴取からでなく、視診という身体診察から始まることを意識します。練達の医師は病歴聴取の前に、患者の雰囲気・表情・声などから、多くの情報を無意識のうちに得ています。身体診察から得られる情報は医師のスキルにより異なります。同じ像が眼に写っていても、ただ見ているのと、注意深く観るのとでは解釈の深みが違います。患者と出会った瞬間から、診断の過程始まっています。

「医学のアートは観察にある」
The art of medicine is in observation.
Sir William Osler

経験

「重要なのはできるだけ多くの患者を診る経験を積むことなのです」とティアニー先生は言います。講義室での学びはもちろん大切です。しかし、主治医として診断する経験から学ぶ経験知にはかきません。診療を通して、患者との対話・診察・そのときの雰囲気は鮮明に記憶されます。上手く診断できた経験は良いものです。しかし、どんな医師も多かれ少なかれ、上手くいかなかった経験を持っています。ネガティブな思い出かもしれません。しかし、人は成功体験よりも失敗からより多くのことを学んでいるはずで、失敗を貴重な経験とし、その後の診療に反映させる姿勢は大切です。

教育

教育者は教育の実践を通して知識を確かなものにしていきます。自らの知識を言語化し第三者へ伝えるには、知識が正確で理論的背景も十分に理解されていることが必須です。理解が深ければ、簡潔な言葉で学習者にとって解りやすい教育ができます。教える過程は学習者のためだけのものではないと思います。その過程で教育者自身も学んでいます。尊敬される、優れた教育者はそのことを知っています。

さらに、教育すること自体を楽しんでいる風情があります。この雰囲気は学習者に敏感に察知され、学びへの動機付けとなります。「教育者の最終的な目標は、生徒にわれわれを超える存在になってもらうことだよ。そうしないと世界は萎縮するからね」とティアニー先生は言います。私が先生を敬愛する理由です。

基礎医学

臨床教育を通して基礎医学の重要性が認識できます。発熱、胸痛などの症状を理論的に理解していくには、解剖学・生理学・生化学の知識が豊富な程、病態への解釈が深くなります。ティアニー先生はこの基礎医学の知識にきわめて優れています。患者の問題を解りやすく説明する背景には、この基礎医学の知識が常に応用されています。

謙虚

以前に男性患者のことを **male** と記述したことがありました。このとき、先生から『**male** には生物学的な「雄」、**female** には「雌」といった響きがある。使ってはいかん』と諭されたことがあります。われわれ医療従事者の仕事は、病を有する「人」を対象としています。他者を尊重し、謙虚であることが肝要です。話を聴いてくれないと患者が感じると、診断に重要な情報を語ってくれない危険が生じます。

「患者の話をお聞きなさい、患者は診断を語ります」
Listen to the patient. He is telling you the diagnosis.
Sir William Osler

煩うことなく虚心坦懐に日々の診療をしたいものです。しかし、これが自分にとっては最も難しいようです。